

教育支援グループ

田辺朋子（国士舘大学）
吉野恵子（女子栄養大学）
今井智子（文化女子大学）

はじめに

私たち教育支援グループは、『私立大学図書館 自己点検・評価手法ガイドライン』¹（以下『ガイドライン』という）「第Ⅰ部 自己点検・評価手法」にある「1. 教育支援」の項目を研究対象とする、大学図書館評価グループの中の1グループとして発足しました。

それゆえ、はじめにこの『ガイドライン』を研究対象として教育支援の項目を検討しましたが、この『ガイドライン』では教育支援に関して「1. 指定図書制度」「2. シラバスに基づく収書」の2項目のみを自己点検・評価の対象として取り扱っており、現在の大学図書館に求められている教育支援活動が果たして、この2項目のみで計れるものなのだろうか、疑問に感じました。

そこで、私たちは、大学図書館の教育支援活動として考えられるべき項目を、あらためて独自に考え、それらの項目を評価する手法を検討することとしました。

大学図書館評価グループ当初の目的である、『ガイドライン』をもう少しわかりやすく、手軽にできるものに改編するということから、少々外れた感もありますが、現在、大学図書館が担うべき教育支援活動は、この『ガイドライン』作成当初より大幅に増えており、また、利用者ニーズも多岐にわたっていることと思います。

それぞれの大学図書館によってコンセプトが違えば、それにとまなう運用方針も変わってきます。それらを一律に評価することは大変難しいことではありますし、また同じ結果が得られたとしても、大学によってそのとらえ方も変わってくるでしょう。大学図書館評価の一律評価については、ISO『図書館パフォーマンス指標』²などもあるので、そちらに任せることとし、私たちの評価はあくまで自己点検という目線に立って実施していただけるよう作成したものです。

以下に、その成果を書き記していく訳ですが、図書館員としてはまだまだ若輩者である私たち研究グループの、大きな思い込みや思い上がりなど見て取れるかもしれません。しかし、これもひとえに、より良い大学図書館づくりを目指し、日々研鑽を積んだ努力の表れとご容赦いただきたく存じます。

1. 教育支援とは

教育支援とは、『ガイドライン』による教育支援の定義は「教育・研究現場とのコミュニケーションをとり、利用者ニーズに応じたサービスの展開をもって学習活動を支援すること」としている。これらに該当する、大学図書館における教育支援活動は、様々なことが

¹ 『私立大学図書館 自己点検・評価手法ガイドライン』（1999年10月 私立大学図書館協会 自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会）

² 「『図書館パフォーマンス指標』IS011620（翻訳）」監訳・糸賀雅児／訳・戸田あきら、小泉史子（『現代の図書館』Vol.36 No.3 1998.9）

考えられる。

学生が学習をする上で必要となる資料の収集・閲覧・貸出、学習の場の提供、その他学習ツールの提供・使用方法等、つまり広義で捉えると、大学図書館そのものが教育支援機関であり、そこで行われている活動は全て、直接的または間接的には教育支援活動に該当すると言えることができる。

ここで、当グループの研究対象を考えたとき、大学図書館で行われている活動すべてを対象とすることは、時間的にも難しく、また、他グループにおける研究対象と重なる部分も多々あることから、ここでは、授業や試験、レポート提出等に直接関わるような大学図書館の活動を教育支援と位置づけ、研究することとした。

2. 評価手法

研究当初、評価手法については、チェックリスト、評価指標、利用者アンケートの3つの方法を検討した。

チェックリストで、教育支援活動の実施の有無を確認し、評価指標で、実施した結果を客観的に数値で捉え、最後に利用者アンケートを実施することで、教育支援に対する評価を利用者から得るという3段階の評価手法である。

しかし、利用者アンケートの作成が遅れ、実際に学生に向けて実施することができなかったため割愛し、チェックリストと評価指標による2段階の評価手法とした。

作成したチェックリストと評価指標は文末に掲載してある。

チェックリストによる評価手法は、【表1】のように、左にチェック項目欄を設け、項目に挙げている内容の実施の有無を確認し、中央のCheck欄に実施しているならば「○」を、実施していないならば「×」を記入（または入力）する。右側には評価のポイント欄を設け、該当の項目を点検する意図を記載してあるので、そのポイントを確認しながらチェックできるように作成してある。

【表1】

教育支援に関する大学図書館評価（チェックリスト）

チェック項目	Check欄	評価のポイント
1. 指定図書の選書及び貸出 <small>※ ここでいう「指定図書」とは、授業で使う資料や参考書を、年度始めまたは期のはじめ毎に選書し、利用に供する資料のことをいいます。</small>		
シラバス・履修案内を見て図書館員が選書している。		指定図書の選書に図書館員が携わっているか。
授業で使う資料・参考書を教員が選書している。		指定図書の選書に教員が携わっているか。

これらの項目を列挙するにあたって注意した点は、曖昧な質問項目がないようにしたことと、各大学図書館のコンセプトによって、必ずしも実施している方が良いとは限らないが、概ね実施していた方が良いと思われるものが「○」の回答になるように配慮した。

つまり、回答に「○」が多ければ、その大学図書館の教育支援に対する取り組みが活発に行われていると言えることができる。

評価指標は、次ページの【表2】「評価に必要な基礎データ」と、【表3】「教育支援に関す

る大学図書館評価指標」に分けて作成した。

【表2】の「評価に必要な基礎データ」は、さらに、「大学基本データ」「図書館基本データ」「評価指標に必要なデータ」「その他把握しておきたいデータ」に分類し、それぞれ該当の項目に当てはまる数値データを記入（または入力）するように作成した。【表3】の「教育支援に関する大学図書館評価指標」には【表2】で集めた数値データを利用し、計算をするだけで指標が算出できるように計算式を示してある。

チェックリストと評価指標をパブリック・サービス研究分科会ホームページよりダウンロードし、Excelファイル上で使用する場合は、【表3】「教育支援に関する大学図書館評価指標」には計算式が入力済みのため計算不要で指標が得られる。

「評価に必要な基礎データ」の算出方法が各大学図書館によって異なる場合も考えられるが、自己点検という見地から、細かな定義はあえてしていない。数値等を算出しがたい場合には概数を使用することも可能としている。

【表2】

評価に必要な基礎データ

大学基本データ	学部学生・大学院生数	人
	全科目数	科目

【表3】

教育支援に関する大学図書館評価指標

1. 指定図書を選書及び貸出		
指定図書回転率	指定図書貸出冊数/指定図書冊数*100	0%
1人あたり指定図書冊数	指定図書冊数/学部学生・大学院生数	0冊

3. 評価項目の作成

教育支援についての定義を、授業や試験、レポート提出等に直接関わるような大学図書館の活動と定めたところで、それに基づき、各自の経験や参考文献等を参考に（文末の【参考文献】参照）、この定義に該当する大学図書館の活動をランダムに列挙した。そして、それらの項目をグルーピングし、最終的に次の6つのグループに項目分けを行った。

1. 指定図書を選書及び貸出
2. リザーブブック制度
3. 情報リテラシー教育
4. 開館時間
5. 機関リポジトリ
6. アンケートの実施

以下、これらの項目に従って、チェックリストの内容および評価指標の内容を検討した。

4-1. 指定図書を選書及び貸出

指定図書については、各大学図書館で選書方法が異なったり、閲覧・貸出方法なども異なったりと、種々様々である。ここでは、次の項目で扱うリザーブブックと区別するため、指定図書を、授業で使う資料や参考書を、年度始めあるいは期ごとに選書し、利用に供する資料と定義する。

この項目での評価ポイントは、指定図書の選書に図書館員と教員が携わっているか、指定図書と一般図書の区別をしているか、指定図書をより多くの学生が閲覧または貸出できるような工夫をしているか、またその案内はできているか等である。

これらのポイントをチェックするためのチェックリストの項目は次の5項目である。

- ・シラバス・履修案内を見て図書館員が選書している。

指定図書の選書に図書館員が携わっているかどうかを確認する。

- ・授業で使う資料・参考書を教員が選書している。

指定図書の選書に教員が携わっているかどうかを確認する。

- ・指定図書を別置したり図書に印をつけたりするなどして、一般の図書と区別している。

指定図書と一般図書の違いがわかるような工夫をしているかどうかを確認する。

- ・指定図書の貸出は、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。

指定図書の閲覧方法や貸出方法を一般図書と別にすることで、より多くの学生に貸出できる工夫をしているかどうかを確認する。

- ・指定図書を科目や教員単位でリストにしている。

指定図書の案内を学生にわかりやすくしているかどうかを確認する。

評価指標では、これらの指定図書が学生の要求に見合っているかを確認するため、以下の2つの指標を算出する。

- ・指定図書回転率（%）： $\text{指定図書貸出冊数} / \text{指定図書冊数} * 100$

指定図書がどのくらいの割合で貸出されているか確認することで、不要な指定図書の見極めや、複本の必要性、貸出期間の設定などを考慮する材料となる。

- ・1人あたり指定図書冊数（冊）： $\text{指定図書冊数} / \text{学部学生} \cdot \text{大学院生数}$

学生1人当たりの指定図書冊数を把握することで、複本の必要性や貸出期間の設定などを考慮する材料となる。

これらの評価指標を算出する対象期間はあえて指定しないが、年間あるいは半期ごと、指定図書の選書ごとが適当と思われる。指定図書の貸出が集中する期間のみで指標を算出すれば、繁忙期の指定図書の状況を把握する良いデータとなりうる。

さらに、より詳細なデータを把握しようとするならば、学部ごとや科目ごと、教員ごとに指標を算出することも効果的である。ただし、この場合、科目ごとの受講者数を把握する必要がある。

これらの指標を元に、指定図書の複本冊数や貸出期間等を検討し、より多くの学生に指定図書を貸出できるような工夫をすることを期待する。

4-2. リザーブブック制度

リザーブブックといえば、先に述べた指定図書をリザーブブックと銘打って運用している大学も多々あることと思われる。ここではその指定図書と区別するため、レポートや課題が発生したときに、事前に教員より必要となる資料の指定を受けて、一般図書とは区別して取り置き、利用に供する資料³と定義する。

この項目での評価ポイントは、レポートや課題が発生した時に、教員より必要となる資料を事前に図書館に連絡するシステムが確立しているか、その資料を購入または取り置きすることで準備できるか、より多くの学生の利用に供することができるように、閲覧方法や貸出方法を柔軟に対応することができるか等である。

これらのポイントをチェックするためのチェックリストの項目は次の4項目である。

- ・レポートや課題が発生したとき、必要な資料をリザーブブックとして教員から指定を受けている。

リザーブブックについて教員が周知し、リザーブブックの必要性が生じた際、図書館と連携してリザーブブックの準備ができるかどうかを確認する。

- ・リザーブブックを利用する利用者数を把握している。

教員からリザーブブックの指定を受けるときに、そのリザーブブックを利用する利用者数を確認したり、レポートや課題の出ている科目の受講者数を確認したりするなどして、リザーブブックを利用する利用者数が把握できるかどうかを確認する。

- ・リザーブブックを、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。

リザーブブックを一般の図書の貸出と別にすることで、より多くの学生に貸出できる工夫をしているかどうかを確認する。

- ・リザーブブックの利用者数及びレポートや課題の提出期間などを鑑み、リザーブブックの貸出方法を柔軟に変更したり、複本の用意をしたりすることができる。

リザーブブックの申出が教員よりあったときに、利用者数やレポート提出期間などを鑑み、閲覧時間や貸出期間を柔軟に変更したり、複本を用意したりすることで、より多くの学生が利用できるような工夫がなされているかどうかを確認する。

評価指標では、リザーブブック制度がどのくらい利用されているのか、またリザーブブックを利用する学生の要求に、リザーブブック冊数が見合っているかを確認するため、以下の3つの指標を算出する。

- ・リザーブブック回転率 (%) : $\text{リザーブブック貸出冊数} / \text{リザーブブック冊数} * 100$
リザーブブックがどのくらいの割合で貸出されているか確認することで、複本の

³ 論文「学生の学びをサポートする大学図書館の取り組み」石井奈穂子（『大学時報 No. 315 2007 July』）の中で、立命館大学図書館が「「試験に代わるレポート」の論題で指定された図書のうち図書館に所蔵があるものを一時的に「館内利用」に変更し、当日内時間単位での貸出を行うことで、より多くの学生へ効率的な図書資料の提供をするのがリザーブブック制度である。」と定義し、実際にその制度を運用している。これを参考に、ここではリザーブブックをもう少し広義な意味で捉え、試験に代わるレポートに限らず、レポート・課題全般にあてはめ、貸出方法なども館内利用や時間単位に限ることなく、一時的に図書をリザーブし、より多くの学生へ効率的な図書資料を提供する制度と捉えることとする。

必要性や館内利用の検討、貸出期間の設定などを考慮する材料となる。科目ごとの評価指標を算出すれば、より詳細なデータを得ることができる。

- ・1人あたりリザーブブック冊数（冊）：リザーブブック冊数／リザーブブック利用者数

リザーブブック利用者数に対し、リザーブブックが何冊あるのか指標を算出することで、複本の必要性や館内利用の検討、貸出期間の設定などを考慮する材料となる。科目ごとの評価指標を算出すれば、科目ごとに必要なリザーブブック冊数を用意したり、貸出期間を検討したりするなど、よりきめ細かなサービスを展開することができる。

- ・リザーブブック制度利用率（％）：リザーブブック申込科目数／全科目数*100

全科目数に対して、リザーブブックの申し込みをしている科目数がどのくらいの割合か知ること、リザーブブック制度の浸透度を図る材料となる。

リザーブブック制度は、大学によっては指定図書制度として取り扱っていたり、制度としては設けていないが、教員からの要望があれば柔軟に対応しているなど、今現在では、大学図書館で行われている一般的な制度とは言い難い。

しかし、要請に応じて図書館が柔軟に資料を準備するということが制度化されることで、よりスムーズにリザーブブックの準備が可能となり、より多くの学生に必要な時に必要な資料をすばやく提供することができるようになるのではないかと考える。

4-3. 情報リテラシー教育

この項目では、大学図書館が学生に対して行う情報リテラシー教育の他に、情報リテラシー教育を行う図書館員の養成についても評価の対象として検討を行った。

この項目での評価ポイントは、学生が授業や研究等で必要とする資料の探し方や、レポート・課題の作成の方法、その際必要となるパソコンの操作方法について情報リテラシー教育を実施しているか、さらに、その実施に当たる図書館員を養成するための研修を実施しているか、情報リテラシー教育にあたる図書館員の人数はニーズに見合っているか等である。

これらのポイントをチェックするためのチェックリストの項目は次の10項目である。

- ・ゼミや授業単位でその分野に特化した情報リテラシー教育を行なっている。

単なるOPAC検索の指導やオリエンテーションと区別し、ゼミや授業の内容に合わせた資料の検索方法や必要となるツールの利用方法を指導しているかどうかを確認する。

- ・レポート作成方法を中心とした情報リテラシー教育⁴を行なっている。

ゼミや授業の内容とは別に、レポートの作成方法や論文の書き方等を、情報リテ

⁴ 論文「学習意欲を高める図書館サービス」米澤誠（『大学時報 No.315 2007 July』）の中で、「レポート作成を中心とした情報リテラシー教育」の項があり、その中で、「学生が最も必要としているレポート作成から説明し、上手なレポートを作成するための情報探索の重要性を説く。」と述べており、レポート作成を中心とした情報リテラシー教育が情報探索のためにも効果的な情報リテラシー教育となることを述べている。

ラシー教育として大学図書館で実施しているかどうかを確認する。

- ・アンケート等を実施し、リテラシー教育の効果を調査・分析⁵している。

情報リテラシー教育を受講した学生や授業を担当する教員にアンケートを行い、回答を調査・分析することで、今後の情報リテラシー教育をより良いものにしていく努力をしているかどうかを確認する。

- ・レポート作成に必要な、パソコン操作の技術指導を行なっている。

レポート作成や論文の書き方だけでなく、実際に必要となるパソコンの技術的指導も行っているかどうかを確認する。

- ・新規図書館員に対して、情報リテラシー教育に必要な知識等の導入教育を行なっている。

必ずしも、司書資格保持者や図書館経験者が図書館員となるとは限らない私立大学図書館の現在の状況において、新規図書館員がいずれ情報リテラシー教育を担当することができるようになるための、基礎的知識の導入教育を実施しているかどうかを確認する。

- ・図書館内において、数年計画で情報リテラシー教育に必要な知識を習得できるような研修プログラムを作成し、実施している。

情報リテラシー教育を担当する図書館員を計画的に養成する学内研修プログラムを独自に作成し、実施しているかどうかを確認する。

- ・図書館内あるいは係単位で共通認識を持つため、定期的にミーティングを行なっている。

日々変わる様々な情報や最新のニュース等、図書館員が共通の認識を持てるような工夫をし、利用者への案内に差異が生じないようにしているかどうかを確認する。

- ・パソコン操作指導に必要な知識を習得するため、学内外の研修等を受講している。

パソコンの技術指導にも対応できるよう、図書館員に学内外の研修等を受講させているかどうかを確認する。

- ・図書館員の専門知識を高めるため図書館内において研修会を開催している。

ゼミや授業の内容に合わせた情報リテラシー教育に対応するため、図書館内で勉強会や研修会を開催し、図書館員の専門知識を高める努力をしているかどうかを確認する。

- ・学外の団体組織（文部科学省や私立大学図書館協会、国立情報学研究所など）が開催する研修会へ積極的に参加している。

広い視野を持つため、図書館内の研修にとどまらず、幅広く情報を取り入れる努力をしているかどうかを確認する。

⁵ 論文「図書館の教育力 ―図書館活用法とゼミツアー―」広沢絵里子（『大学時報 No. 315 2007 July』）の中で、明治大学のゼミツアーについて述べており、その中で、「ゼミツアーについては、教員にアンケートの回答を2度お願いしている。実施直後には、ツアー内容の改善点などを指摘してもらうためのアンケートを行い、さらに年度末には、それぞれの授業においてツアーの教育効果がどのような形でみられたかを回答していただくのである。」とゼミツアー後の学生への効果を確認し、レポート・論文作成時には図書館資料がより多く活用されるようになったと事例の紹介をしている。

評価指標では、学生・教員が図書館の情報リテラシー教育をどのくらい利用しているのか、学生数または図書館員数に対する情報リテラシー教育担当者数やパソコン操作の指導者数はどのくらいかを確認するため、以下の5つの指標を算出する。

- ・情報リテラシー教育受講割合(%)：情報リテラシー教育受講者延べ数／学部学生・大学院生数*100

延べ数ではあるが、情報リテラシー教育受講割合を算出することで、学生への浸透度を確認する。実数で算出できれば情報リテラシー教育を受けた人とそうでない人の割合を正確に把握することもできる。

さらに、情報リテラシー教育の内容別に指標を算出することで、利用者ニーズの高い内容と、そうでないもの、周知ができていない情報リテラシー教育などを把握することができ、今後の情報リテラシー教育を実施するにあたって役立つ材料となる。

- ・情報リテラシー教育の指導者1人あたりの学生数(人)：学部学生・大学院生数／情報リテラシー教育の指導者数

情報リテラシー教育の指導者1人あたりの学生数を知ることで、情報リテラシー教育の実施回数や1回の実施の収容定員等を検討したり、情報リテラシー教育の指導者数の過不足を検討したりする材料となる。

- ・パソコン操作の指導者1人あたりの学生数(人)：学部学生・大学院生／パソコン操作の指導者数

パソコン操作に関する情報リテラシー教育講座に対応できる図書館員数を把握するとともに、図書館開館時に図書館内の端末等に関する質問等があった場合に、どのくらいの図書館員が対応に当たることができるのか知る材料となる。

- ・図書館員数に対する情報リテラシー教育の指導者数の割合(%)：情報リテラシー教育の指導者数／図書館員*100
- ・図書館員数に対するパソコン操作の指導者数の割合(%)：パソコン操作の指導者数／図書館員数*100

図書館員全体のスキルアップのためにも、上記2つの指標は100%を目指したい指標ではないだろうか。

情報リテラシー教育は、大学図書館のみの取り組みではなく、大学全体で取り組んでいる大学も多い。そんな中、情報を扱うプロフェッショナルとして図書館が情報リテラシー教育に果たす役割は大きい。図書館がこれらの活動をリードしていくためにも、図書館員のスキルupと学生・教員への広報活動も重要な役割と考えられる。

4-4. 開館時間

試験の時期やレポート・論文の提出時期は、通常の時期以上に学生が図書館に来館し、利用時間も長くなる。こんな時は座席が狭隘化し、快適な利用環境を維持できない大学もあるのではないだろうか。

ここでは、学生の利用が集中する時期に開館時間を延長したり、休日の開館をしたりすることで、座席の狭隘化を緩和し、学生の利用環境の維持を図る取り組みを、評価の対象として検討を行った。

この項目での評価ポイントは、試験期やレポート提出に合わせて開館時間を延長しているか、日曜・祝祭日の開館を行っているか、これらを実施したことでどのくらい狭隘化が緩和されたか等である。

これらのポイントをチェックするためのチェックリストの項目は次の3項目である。

- ・試験期には開館時間を特別に延長している。

試験期に開館時間を延長しているかどうかを確認する。

- ・課題やレポート提出に合わせて、開館時間を特別に延長している。

課題提出やレポート提出に合わせて、開館時間を延長しているかどうかを確認する。

- ・試験期や課題提出時の日曜・祝祭日に開館をしている。

学生の利用が集中する時期に、日曜・祝祭日の開館をしているかどうかを確認する。

ここでの評価指標は、学生で混み合う時期の開館時間を延長したことで、その狭隘化がどの程度解消できているのかを把握するため、以下の4つの指標を算出する。

- ・通常の開館時間数（時間）：通常の開館時間－通常の開館時間

「通常開館時の1人あたりの座席占有時間」を算出するために必要となる。

- ・特別延長時の開館時間数（時間）：特別延長時の開館時間－特別延長時の開館時間

「特別延長時の1人あたりの座席占有時間」を算出するために必要となる。

- ・通常開館時の1人あたりの座席占有時間（時間）： $\text{全座席数} \times \text{通常の開館時間数} / \text{通常開館時の1日平均入館者数}$

通常の開館時間の時に図書館に来館した利用者が、どのくらいの時間、座席を占めているのか把握することができる。

- ・特別延長時の1人あたりの座席占有時間（時間）： $\text{全座席数} \times \text{特別延長時の開館時間数} / \text{特別延長時の1日平均入館者数}$

特別延長時に図書館に来館した利用者が、どのくらいの時間座席を占めているのか把握することができる。

「通常開館時の1人あたりの座席占有時間」と「特別延長時の1人あたりの座席占有時間」の2つの指標の時間差が少なければ、あくまで平均値ではあるが、利用者は図書館が学生で込み合っている時でも、変わらぬ時間座席を占有することができているので、狭隘化は緩和されているとみなすことができる。

通常開館時の1日平均入館者数と特別延長時の1日平均入館者数については、あえて、その数値の算出方法を示さない。その根拠はそれを定義することで算出を困難にすることを避けるためである。

算出方法を例示するならば、通常開館時の1日平均入館者数は「1年間の入館者数/1年間の開館日数」、特別延長時の1日平均入館者数は、「特別延長時の入館者数/特別延長時の開館日数」がオーソドックスであろう。特別延長時の1日平均入館者数を、1年間の最大入館者数としたり、おおよその概数で算出したりしても良い。

また、特別延長や休日の開館等を行っていない図書館であっても、「全座席数*通常の開館時間/最大入館者数」を算出し、「通常開館時の1人あたりの座席占有時間」と比較すると、学生の利用が集中するときの混雑具合を把握することができ、学生の学習環境確保の

ために一役担う指標とすることができる。

4-5. 機関リポジトリ

機関リポジトリとは、大学などの研究機関がその知的生産物を収集し、蓄積し、公開するシステムであることから、この項目については、電子情報サービスグループでの検討も考えられた。しかし、最終的に、知的生産物の範囲を、学位論文や紀要など一般的な機関リポジトリで蓄積されているコンテンツの他に、日常の授業の中で使う教材や講義記録などのコンテンツも機関リポジトリに含めて、評価の対象とすることで、教育支援の評価項目として取り扱うこととなった。

そのため、ここでの評価の目線は、電子情報の具体的な構築方法や収集方法ではなく、学生の教育支援の一助として機関リポジトリが構築できているのかどうかを評価するものとする。

この項目での評価ポイントは、図書館が機関リポジトリの構築を検討し、研究成果の収集・蓄積・公開をしているか、機関リポジトリに登録するコンテンツ作りの支援を行っているか等である。

これらのポイントをチェックするためのチェックリストの項目は次の3項目である。

- ・機関リポジトリの構築を検討している。

大学における研究成果等の知的生産物を機関リポジトリとして収集することを図書館で検討しているかどうかを確認する。

- ・学内における研究成果の収集をし、公開をしている。

図書館において研究成果の収集をし、蓄積し、公開をするシステムを実施しているかどうかを確認する。

- ・機関リポジトリ登録データや教材等の作成支援をしている。

機関リポジトリに収集するデータや授業で使用する教材・講義記録などコンテンツ作りの支援をしているかどうかを確認する。

機関リポジトリに関する評価指標は、作成していない。次ページの「5. 実施結果」を見てもわかるとおり、この項目に関しては、パブリック・サービス研究分科会においては実施している大学が少なく、実施した成果から指標を算出し検討をする段階まで至らなかった。そのため、今の段階では指標を作成することはせず、まず、教育支援活動として機関リポジトリの構築に取り組むことを考え、取り組みに実績が伴ってきたときに、どのような指標を算出し今後のサービス展開につなげるべきかを考えることとした。

そして、これから機関リポジトリを実施し、その実績を把握するにあたって、必要になるであろう次の2項目を、その他把握しておきたいデータとして掲げる。

- ・機関リポジトリ登録件数
- ・機関リポジトリアクセス回数

4-6. アンケートの実施

教育支援に関して図書館を評価するにあたっては、最終的には利用者によるアンケートが不可欠と思われる。しかし、先にも述べたように、アンケートを実施するための項目作りまで、この研究では取り組むことができなかったため、ここで確認をするのは、大学図

書館独自で図書館の教育支援活動についてアンケートを行なっているかどうかの確認、およびそのアンケート結果が教育支援に反映できているかの確認を行なう項目をチェックリストとして作成した。

その項目は以下の2項目である。

- ・学生のニーズ把握のためアンケートを行なっている。
- ・その調査結果を分析・評価し、サービス内容の検討をしている。

この項目に関しても、先の機関リポジトリ同様、評価指標は作成していない。

アンケートを実施している場合、次に掲げるデータは把握しておきたい。

- ・年間アンケート回数
- ・アンケート回収率

5. 実施結果

作成したチェックリスト及び評価指標をパブリック・サービス研究分科会の会員校に実施し、18大学19図書館中17図書館から回答を得た。

チェックリストの結果は、次ページの【表4】に示す通りである。

評価の実施結果は、チェック項目ごとに、回答「○」の占める割合をパーセントで表示した。

項目によってもばらつきはあるが、「全回答数に対する○の回答率」を見ると、「31.5%」ということで、当グループで作成したチェック項目のおよそ3割が実施に至っていることがわかる。

また、【表4】からは見て取れない数値ではあるが、各1から6の大項目ごとで、1つでも「○」を回答している大学の割合を見てみると、次のような結果が得られる。

1. 指定図書を選書及び貸出	70.6%
2. リザーブブック制度	41.2%
3. 情報リテラシー教育	94.1%
4. 開館時間	47.1%
5. 機関リポジトリ	31.3%
6. アンケートの実施	11.8%

このように、チェックリストの結果を見てみると、「指定図書を選書及び貸出」や「情報リテラシー教育」などは、70%から95%の「○」回答となり、1つ1つの項目ごと見ると、実施している大学が少ないように感じるが、このように見てみると、多くの大学が実施していると捉えることができる。「リザーブブック制度」や「開館時間」も半数近い大学が取り組んでいると考えても良いであろう。

このことから考えられるのは、今、各大学図書館において、上記6項目に関する教育支援活動は何らかの形で行われてはいるが、その運用方法などはまちまちで、細かくチェックをすることで、実施している内容とそうでない内容が明らかになった。

これからの取り組みとしては、教育支援活動の内容をより精査し、多角的に教育支援活動を見直すことで、よりきめ細かな支援ができるのではないかと考える。

【表 4】 教育支援に関する大学図書館評価（チェックリスト）実施結果

チェック項目	○回答率	○回答数	×回答数	全回答数
全回答数に対する○の回答率	31.5%	141	306	447
1. 指定図書の選書及び貸出				
シラバス・履修案内を見て図書館員が選書している。	52.9%	9	8	17
授業で使う資料・参考書を教員が選書している。	62.5%	10	6	16
指定図書を別置したり図書に印をつけたりするなどして、一般の図書と区別している。	35.3%	6	11	17
指定図書の貸出は、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。	23.5%	4	13	17
指定図書を科目や教員単位でリストにしている。	37.5%	6	10	16
2. リザーブブック制度				
レポートや課題が発生したとき、必要な資料をリザーブブックとして教員から指定を受けている。	41.2%	7	10	17
リザーブブックを利用する学生数を把握している。	12.5%	2	14	16
リザーブブックを、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。	25.0%	4	12	16
リザーブブックの利用者数及びレポートや課題の提出期間などを鑑み、リザーブブックの貸出方法を柔軟に変更したり、複本の用意をしたりすることができる。	18.8%	3	13	16
3. 情報リテラシー教育				
ゼミや授業単位でその分野に特化した情報リテラシー教育を行なっている。	64.7%	11	6	17
レポート作成方法を中心とした情報リテラシー教育を行なっている。	47.1%	8	9	17
アンケート等を実施し、リテラシー教育の効果を調査・分析している。	29.4%	5	12	17
レポート作成に必要な、パソコン操作の技術指導を行っている。	29.4%	5	12	17
新規図書館員に対して、情報リテラシー教育に必要な知識等の導入教育を行なっている。	35.3%	6	11	17
図書館内において、数年計画で情報リテラシー教育に必要な知識を習得できるような研修プログラムを作成し、実施している。	0.0%	0	17	17
図書館内あるいは係単位で共通認識を持つため、定期的にミーティングを行なっている。	56.3%	9	7	16
パソコン操作指導に必要な知識を習得するため、学内外の研修等を受講している。	31.3%	5	11	16
図書館員の専門知識を高めるため図書館内において研修会を開催している。	17.6%	3	14	17
学外の団体組織（文部科学省や私立大学図書館協会、国立情報学研究所など）が開催する研修会へ積極的に参加している。	93.8%	15	1	16
4. 開館時間				
試験期には開館時間を特別に延長している。	17.6%	3	14	17
課題やレポート提出に合わせて、開館時間を特別に延長している。	5.9%	1	16	17
試験期や課題提出時の日曜・祝祭日に開館をしている。	35.3%	6	11	17
5. 機関リポジトリ				
機関リポジトリの構築を検討している。	25.0%	4	12	16
学内における研究成果の収集をし、公開をしている。	18.8%	3	13	16
機関リポジトリ登録データや教材等の作成支援をしている。	12.5%	2	14	16
6. アンケートの実施				
学生のニーズ把握のためアンケートを行っている。	11.8%	2	15	17
その調査結果を分析・評価し、サービス内容の検討をしている。	12.5%	2	14	16

評価指標の結果は、次の【表5】に示す通りである。

ここでは、評価の結果得られた数値を分析することはせず、回答率から大学図書館の教育支援活動に対する取り組み具合や、実績の把握度合い等を検討した。

まず、評価指標の「評価に必要な基礎データ」に対する回答率を見てみると、39.5%ということで約4割の回答を得ている。チェックリストでの「○」の回答率が約3割、つまりチェックリストで確認を行った教育支援活動が約3割実施されている中で、実際の数値データが4割得られたということは、教育支援活動を実施していることに関する数値データがおおよそ把握できているようにも見受けられるが、評価に必要な基礎データには「学部学生・大学院生数」「図書館員数」「通常の開館時間」「通常の開館時間」など、100%の回答が得られる項目があることを考えると、決して、教育支援活動に対する数値データを把握しているところが多いとは考えられない。つまり、教育支援活動を実施していても、その実績を把握している大学はあまり多くないと言えることができる。

たとえば指定図書の見えてみると、チェックリストでは各項目2割から6割の実施が見られるにも関わらず、指定図書の冊数を把握しているのが約3割、貸出冊数に至っては0%ということで、指定図書に関して何らかの活動を行っていても、その実績についてはほとんど把握できていない状況と見て取ることができる。

おそらく、この評価を実際に実施してくれたパブリック・サービス研究会のメンバー自身が、担当外のことについては回答ができなため、データを算出できなかったということも考えられるし、パソコン操作の指導者数などは、他部署との連携によって行っているため、図書館にはそういう指導者が

【表5】教育支援に関する大学図書館評価（評価指標）実施結果

評価に必要な基礎データ		回答率	回答数
全項目に対する回答率		39.5%	161
大学基本データ	学部学生・大学院生数	100.0%	17
	全科目数	17.6%	3
図書館基本データ	図書館員数	100.0%	17
	パソコン操作の指導者数	29.4%	5
	情報リテラシー教育の指導者数	64.7%	11
	全座席数	82.4%	14
	通常の開館時間（00:00の形式で入力）	100.0%	17
	通常の開館時間（00:00の形式で入力）	100.0%	17
	通常開館時の1日平均入館者数	58.8%	10
評価指標に必要なデータ	1. 指定図書の選書及び貸出		
	指定図書冊数	29.4%	5
	指定図書貸出冊数	0.0%	0
	2. リザーブブック制度		
	リザーブブック冊数	11.8%	2
	リザーブブック貸出冊数	5.9%	1
	リザーブブック利用者数	0.0%	0
	リザーブブック申込科目数	11.8%	2
	3. 情報リテラシー教育		
	情報リテラシー教育受講者延べ数	64.7%	11
	情報リテラシー教育回数	52.9%	9
	4. 開館時間		
	特別延長時の開館時間（00:00の形式で入力）	35.3%	6
	特別延長時の閉館時間（00:00の形式で入力）	29.4%	5
特別延長時の1日平均入館者数	23.5%	4	
その他把握しておきたいデータ	5. 機関リポジトリ		
	機関リポジトリ登録件数	5.9%	1
	機関リポジトリアクセス回数	5.9%	1
	6. アンケートの実施		
	年間アンケート回数	11.8%	2
アンケート回収率	5.9%	1	

いない、ということも考えられるが、それでも回答率としては、低いものとする。

回答率が低いということは、手軽に使える指標とは言い難いのかもしれない評価指標となった。しかし、数値を算出するのは全部で24項目、これらのデータを埋めて、指標を算出することが、今後の教育支援活動の推進にもつながると思い、あえて提案する。

参考までに、指標を算出することができた大学の評価指標を掲載する（【表6】～【表8】参照）。学生数に応じて大学をAからDの区分に分け、大学名を伏せて掲載した。学生数2万～3万人を「A」、学生数1万～1万5千人を「B」、学生数6千～9千人を「C」、学生数1千～3千人を「D」とし、同じ区分に所属する大学は算用数字で分けた。

【表6】リザーブブック制度に関する評価指標結果

評価指標	D4
リザーブブック回転率	545%
リザーブブック制度利用率	4%

【表7】情報リテラシー教育に関する評価指標結果

評価指標	A1	A2	B1	B2	B3	B4
情報リテラシー教育受講割合（%）	4%	6%	15%	7%	11%	6%
情報リテラシー教育の指導者1人あたりの学生数（人）	7,278人	1,294人		3,070人	2,261人	1,959人
パソコン操作の指導者1人あたりの学生数（人）	7,278人	1,294人			617人	
図書館員数に対する情報リテラシー教育の指導者数の割合（%）	24%	100%		19%	16%	46%
図書館員数に対するパソコン操作の指導者数の割合（%）	24%	100%			58%	
評価指標	C1	C2	D2	D3	D4	D5
情報リテラシー教育受講割合（%）	29%	5%	6%	18%	40%	
情報リテラシー教育の指導者1人あたりの学生数（人）	1,417人	912人	351人	324人	270人	304人
パソコン操作の指導者1人あたりの学生数（人）					236人	152人
図書館員数に対する情報リテラシー教育の指導者数の割合（%）	43%	33%	27%	75%	54%	50%
図書館員数に対するパソコン操作の指導者数の割合（%）					62%	100%

【表8】開館時間に関する評価指標結果

評価指標	A2	B3	B4	C1	C2	D1	D2	D3	D4	D5
通常開館時の1人あたりの座席占有時間（時間）	19:20	9:04	10:03	7:23	7:48	11:18	4:51	15:58	8:42	8:27
特別延長時の1人あたりの座席占有時間（時間）		6:29		4:17				8:48		6:22

6. おわりに

大学図書館における教育支援活動を評価する手法を考えるにあたり、数々の文献を読む他、分科会活動の中で様々な大学図書館を見学し、その大学の取り組みを聞くことでも、多くのヒントを得ることができました。自館の大学のみならず、他校の大学図書館を目の当たりにすることで、幅広い視野をもって評価手法を検討することができたのではないかと思います。

検討の中で、他大学図書館との比較までを目標にと思う一面もありましたが、幅広い視野を持ったが故に、比較のための一律の評価手法を作成することの難しさを知り、最終的に自己点検という目線に留まったことは少々残念なことではありますが、現状を思えば、まずは、自己点検から始めるべきではないかと考えます。

自館を点検し、自館を十分に知った上で、他館を知る、各大学図書館が自館を十分に認識した上で、はじめて他大学図書館との比較を考えられるのではないかと思います。

私たちも作成した評価手法を自館に持ち帰り、改めて自館を点検するとともに、この評価手法を目にさせていただいた方にも、是非ともご活用いただきたく存じます。そして、この自己点検を大学図書館の評価の第一歩とし、今後の評価研究につながることを期待したいと思います。

そして、この度の研究にあたって、慶應義塾大学の加藤好郎氏、パブリック・サービス研究分科会の会員各位、各大学図書館の皆様方、ご講演いただいた方々には、一方ならぬご協力をいただき、誠にありがとうございました。今後とも引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

【参考文献】

1. 『私立大学図書館 自己点検・評価手法ガイドライン』（1999年10月 私立大学図書館協会 自己点検・評価手法ガイドライン作成委員会）
2. 「『図書館パフォーマンス指標』IS011620（翻訳）」監訳・糸賀雅児／訳・戸田あきら、小泉史子（『現代の図書館』Vol. 36 No.3 1998.9）
3. 「学生の学びをサポートする大学図書館の取り組み」石井奈穂子（『大学時報 2007 July』）
4. 「学習意欲を高める図書館サービス」米澤誠（『大学時報 2007 July』）
5. 「図書館の教育力 ―図書館活用法とゼミツア―」広沢絵里子（『大学時報 2007 July』）
6. 「大学図書館の新展開 ―学習支援を中心に―」上田修一（『大学時報 2007 July』）
7. 「国際規格『図書館パフォーマンス指標』日本語訳」の掲載にあたって」糸賀雅児（『現代の図書館』Vol. 36 No.3 1998.9）
8. 「研究発表 大学図書館の評価手法と利用者側からの大学図書館の評価方法」パブリック・サービス研究分科会（『私立大学図書館協会会報』116 2001.7）
9. 「研究発表 大学図書館の評価方法 ―私立大学図書館 自己点検・評価手法ガイドラインより」パブリック・サービス研究分科会（『私立大学図書館協会会報』118 2002.11）

10. 「講演(4) 大学図書館の教育支援：その事例と評価手法」慶應義塾大学三田メディアセンター 加藤好郎（『私立大学図書館協会会報』111 1992.2）
11. 「＜図書館訪問記＞アメリカ大学図書館の情報リテラシー教育支援サービス」小林真木子（『大学図書館研究』67 2003.3）
12. 「海外における大学図書館の情報教育支援サービスと情報発信について：ミシガン大学、コロンビア大学、アメリカ議会図書館」吉田敬治（『大学図書館研究』59 2000.9）
13. 「特集：情報リテラシー 三重大学附属図書館の情報リテラシー教育支援」杉田いづみ、河谷宗徳、後藤美由紀（『情報の科学と技術』52巻11号 2002）
14. 「特集：情報活動と標準規格 図書館評価－パフォーマンス指標と統計」徳原直子（『情報の科学と技術』56巻7号 2006）
15. 「特集：図書館パフォーマンス指標と経営評価の国際動向 図書館パフォーマンス指標と図書館統計の国際標準化の動向」徳原直子（『現代の図書館』Vol.40 No.3 2002）
16. 「特集：自己評価の方法－ISO 図書館パフォーマンス指標を例に 図書館パフォーマンス指標の背景と特徴」糸賀雅児（『現代の図書館』Vol.38 No.1 2000）
17. 「特集：図書館の評価 大学図書館の自己点検・評価とマネジメント：名古屋大学のケース」大埜浩一（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
18. 「特集：図書館の評価 利用統計を用いた蔵書評価の手法」岸田和明（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
19. 「特集：図書館の評価 計量的データによる図書館評価」逸村裕（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
20. 「特集：図書館の評価 結果の評価とプロセスの評価」柳与志夫（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
21. 「特集：図書館の評価 武蔵野市立図書館における利用者調査」船崎尚（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
22. 「特集：図書館の評価 利用者満足と調査の実践事例－専門図書館のリエンジニアリングに向けて－」山田奨、井上信（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
23. 「特集：図書館の評価 評価を高めるための利用者調査の活用－QC手法による改善活動事例－」内山雅亘（『情報の科学と技術』44巻6号 1994）
24. 「特集：自己評価の方法 岐阜大学附属図書館の自己評価」諏訪田義美、弘瀬高久、村上喜廣、中斎二三博、上口政昭（『現代の図書館』VOL.38 No.1 2000）
25. 「特集：図書館の統計と規格 我が国を取り巻く国際規格の環境－図書館事業に関して－」菊田昌弘（『現代の図書館』VOL.36 No.3 1998）
26. 「第45回研究大会シンポジウム 図書館のサービス評価を考える」発表者：柴田正美（三重大学）、田井郁久雄（元・岡山市立図書館）、蒲生英博（名古屋大学附属図書館）、林貴子（長野県阿南高等学校）、永田治樹（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）（『図書館界』VOL.56 No.2 July 2004）
27. 「投稿 電子ジャーナルのオープンアクセスと機関リポジトリ－どこからきてどこに向かうのか(I)オープンアクセス出版の動向」時実象一（『情報の科学と技術』57巻4号 2007）

28. 「電子ジャーナルのオープンアクセスと機関リポジトリ ―どこから来てどこに向かうのか(Ⅱ)機関リポジトリと研究助成機関の動向」時実象一 (『情報の科学と技術』57巻5号 2007)
29. 『平成17年度学術情報基盤実態調査結果報告』文部科学省研究振興局情報課 平成18年12月
30. 『未来をつくる図書館』菅谷明子 岩波書店 (2003.9)
31. 「専門性の確立と強化を目指す研修事業検討ワーキンググループ(第2次)報告書 2000/03/21」 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jla/kenshu/kenshuwg/hokoku.pdf>)
32. 『大学図書館における評価指標報告書 (Version 0)』法人格取得問題に関する附属図書館懇談会 図書館評価指標WG 2002年3月14日 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/janul/j/publications/reports/73.pdf>)

教育支援に関する大学図書館評価(評価指標)

評価に必要な基礎データ

大学基本データ	学部学生・大学院生数	人
	全科目数	科目
図書館基本データ	図書館員数	人
	パソコン操作の指導者数	人
	情報リテラシー教育の指導者数	人
	全座席数	席
	通常の開館時間 (00:00の形式で入力)	
	通常の開館時間 (00:00の形式で入力)	
	通常開館時の1日平均入館者数	人
評価指標に必要なデータ	1. 指定図書の見出し及び貸出	
	指定図書冊数	冊
	指定図書貸出冊数	冊
	2. リザーブブック制度	
	リザーブブック冊数	冊
	リザーブブック貸出冊数	冊
	リザーブブック利用者数	人
	リザーブブック申込科目数	科目
	3. 情報リテラシー教育	
	情報リテラシー教育受講者延べ数	人
	情報リテラシー教育回数	回
	4. 開館時間	
	特別延長時の開館時間 (00:00の形式で入力)	
	特別延長時の閉館時間 (00:00の形式で入力)	
	特別延長時の1日平均入館者数	人
	その他把握しておきたいデータ	5. 機関リポジトリ
機関リポジトリ登録件数		件
機関リポジトリアクセス回数		回
6. アンケートの実施		
年間アンケート回数		回
アンケート回収率		%

教育支援に関する大学図書館評価(評価指標)

教育支援に関する大学図書館評価指標

1. 指定図書を選書及び貸出		
指定図書回転率	指定図書貸出冊数/指定図書冊数*100	0 %
1人あたり指定図書冊数	指定図書冊数/学部学生・大学院生数	0 冊
2. リザーブブック制度		
リザーブブック回転率	リザーブブック貸出冊数/リザーブブック冊数*100	0 %
1人あたりリザーブブック冊数	リザーブブック冊数/リザーブブック利用者数	0 冊
リザーブブック制度利用率	リザーブブック申込科目数/全科目数*100	0 %
3. 情報リテラシー教育		
情報リテラシー教育受講割合	情報リテラシー教育受講者延べ数/学部学生・大学院生数*100	0 %
情報リテラシー教育の指導者1人あたりの学生数	学部学生・大学院生数/情報リテラシー教育の指導者数	0 人
パソコン操作の指導者1人あたりの学生数	学部学生・大学院生数/パソコン操作の指導者数	0 人
図書館員数に対する情報リテラシー教育の指導者数の割合	情報リテラシー教育の指導者数/図書館員数*100	0 %
図書館員数に対するパソコン操作の指導者数の割合	パソコン操作の指導者数/図書館員数*100	0 %
4. 開館時間		
通常の開館時間数	通常の開館時間－通常の開館時間	0:00 時間
特別延長時の開館時間数	特別延長時の閉館時間－特別延長時の開館時間	0:00 時間
通常開館時の1人あたりの座席占有時間	全座席数*通常の開館時間数/通常開館時の1日平均入館者数	0:00 時間
特別延長時の1人あたりの座席占有時間	全座席数*特別延長時の開館時間数/特別延長時の1日平均入館者数	0:00 時間

教育支援に関する大学図書館評価（チェックリスト）

チェック項目	Check欄	評価のポイント
1. 指定図書の選書及び貸出 <small>※ ここでいう「指定図書」とは、授業で使う資料や参考書を、年度始めまたは期のはじめ毎に選書し、利用に供する資料のことをいいます。</small>		
シラバス・履修案内を見て図書館員が選書している。		指定図書の選書に図書館員が携わっているか。
授業で使う資料・参考書を教員が選書している。		指定図書の選書に教員が携わっているか。
指定図書を別置したり図書に印をつけたりするなどして、一般の図書と区別している。		指定図書と一般図書の違いがわかるように工夫しているか。
指定図書の貸出は、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。		指定図書の貸出制度を、一般の図書の貸出制度と区別し、より多くの学生に貸出できる工夫をしているか。
指定図書を科目や教員単位でリストにしている。		指定図書の案内を学生にわかりやすくしているか
2. リザーブブック制度 <small>※ ここでいう「リザーブブック」とは、レポートや課題が発生したときに、教員より指定を受けて、利用に供する資料のことをいいます。</small>		
レポートや課題が発生したとき、必要な資料をリザーブブックとして教員から指定を受けている。		リザーブブックが発生した時、速やかな対応ができるよう図書館と教員との連携ができているか。
リザーブブックを利用する学生数を把握している。		リザーブブックを利用する学生数について科目担当の教員より情報を入手できるか。
リザーブブックを、一般の図書の貸出とは別に貸出制度を設けている。		リザーブブックを一般の図書の貸出と別にすることで、より多くの学生に貸出できる工夫をしているか。
リザーブブックの利用者数及びレポートや課題の提出期間などを鑑み、リザーブブックの貸出方法を柔軟に変更したり、複本の用意をしたりすることができる。		リザーブブックの必要な学生数や、リザーブする期間などに応じて、柔軟に貸出方法を変更したり、複本を用意することで、より多くの学生に貸出できる工夫をしているか。
3. 情報リテラシー教育		
ゼミや授業単位でその分野に特化した情報リテラシー教育を行なっている。		ゼミや授業にそった内容の情報リテラシー教育ができるか。
レポート作成方法を中心とした情報リテラシー教育を行なっている。		ゼミや授業内容とは別に、レポートの作成方法や論文の書き方などを内容とする情報リテラシー教育を行っているか
アンケート等を実施し、リテラシー教育の効果を調査・分析している。		情報リテラシー教育を受けた学生にアンケート等を実施し、評価を得ているか、また、その結果を分析し以後の情報リテラシー教育に生かしているか。

教育支援に関する大学図書館評価（チェックリスト）

チェック項目	Check欄	評価のポイント
レポート作成に必要な、パソコン操作の技術指導を行っている。		レポート作成や論文作成に必要なパソコン操作の技術的指導を利用者に対して図書館で行っているか
新規図書館員に対して、情報リテラシー教育に必要な知識等の導入教育を行なっている。		情報リテラシー教育を行うにあたって、必要となる基礎知識を導入教育として新規図書館員に実施しているか。
図書館内において、数年計画で情報リテラシー教育に必要な知識を習得できるような研修プログラムを作成し、実施している。		情報リテラシー教育を行う図書館員養成のためのプログラムを作成し、複数年単位で実施しているか。
図書館内あるいは係単位で共通認識を持ったため、定期的にミーティングを行なっている。		情報リテラシー教育を行うにあたって、図書館内あるいは係単位で知識を共有するための定期的なミーティングを行っているか
パソコン操作指導に必要な知識を習得するため、学内外の研修等を受講している。		図書館員がパソコン操作の技術的指導に必要な知識を習得するための研修等を行っているか、または学外において受講しているか。
図書館員の専門知識を高めるため図書館内において研修会を開催している。		情報リテラシー教育を行うにあたって、図書館員の専門知識を高めるために図書館内において研修会などを開催しているか。
学外の団体組織（文部科学省や私立大学図書館協会、国立情報学研究所など）が開催する研修会へ積極的に参加している。		情報リテラシー教育を行うために必要な知識を得るために学外の研修などに参加しているか
4. 開館時間		
試験期には開館時間を特別に延長している。		試験期で学生が込み合う時に開館時間を特別に延長しているか。
課題やレポート提出に合わせて、開館時間を特別に延長している。		課題やレポート提出で学生が込み合う時に開館時間を特別に延長しているか。
試験期や課題提出時の日曜・祝祭日に開館をしている。		試験期や課題等の提出で学生が込み合う時に、日曜日や祝祭日の開館を行っているか。
5. 機関リポジトリ		
機関リポジトリの構築を検討している。		機関リポジトリの構築を図書館において検討しているか。
学内における研究成果の収集をし、公開をしている。		図書館において、学内の研究成果を収集し、公開をしているか。
機関リポジトリ登録データや教材等の作成支援をしている。		機関リポジトリに登録するデータ作りや教材作りの支援をしているか。
6. アンケートの実施		
学生のニーズ把握のためアンケートを行っている。		教育支援に関して、学生にアンケートを行っているか。
その調査結果を分析・評価し、サービス内容の検討をしている。		アンケートを行った結果を分析・評価して以後の教育支援活動に生かしているか。